

出張報告書

令和2年2月18日

会派名

志誠会

会長

立崎 聡一 様

出張者氏名

近藤 憲治



下記のとおり出張したので報告します。

立崎 聡一



記

出張期間	令和2年2月15日（土） ～ 令和2年2月17日（月）							〔3日間〕
出張概要	①	月日	2月15日	市町村名	東京	会場	参議院議員 高橋克法氏事務所及び新橋地区の貸会議室	
		目的	研修					
		テーマ	都市間連携による網走食材販路拡大意見交換					
	②	月日	2月16日	市町村名	名古屋	会場	i.m.y ホール（名古屋市千種区）	
		目的	研修					
		テーマ	「これからの医療とまちづくりシンポジウム」					
	③	月日	2月17日	市町村名		会場		
		目的	移動日					
		テーマ						
	④	月日		市町村名		会場		
		目的						
		テーマ						
所見	別紙のとおり							
備考								

※所見については、別紙（任意様式）で作成して下さい。

都市間連携による網走食材販路拡大に向けた要請と意見交換 及び

「これからの医療とまちづくりシンポジウム」に関する報告

日時：令和2年2月15日（土）、16日（日）

場所：東京都及び名古屋市

参加議員：近藤憲治、立崎聡一

①都市間連携による網走食材販路拡大意見交換

日時：2月15日午後2時～午後6時

場所：参議院議員 高橋克法 氏事務所及び新橋地区の貸会議室

都市間連携による網走食材販路拡大に向けた意見交換は2月15日、東京都内2カ所を会場に行った。世界一長い焼きちくわづくり対決や網走ちゃんぽんの開発で交流を深める長崎県雲仙市の行政職員及び民間企業経営者ら共に、ご当地ちゃんぽんの開発で縁を得た栃木県高根沢町の元町長で参議院議員の高橋克法氏に御力添えを得て開催の運びとなった。第1部の主たる議題は、ご当地ちゃんぽんが全国各地域で開発され、地域活性化の素材として利活用される例が広がってきていることを受け、これらの施策をパッケージ化して、地域の食材の販路拡大策ともあわせて全国各地に落とし込んでいけないか、という点であった。ちゃんぽんが持つ食文化や素材の多様性を受け止める包容力を活かし、食による地域活性化を志向する地域にノウハウを提供できる方策を導き出そうという点で意見の一致を見た。そういった点においては農林水産省や経済産業省、さらに食育の視点も踏まえて、文部科学省への情報提供と連携も必要であるとの見解に至り、その旨要請した。都市間交流で始まった取り組みが全国レベルの発信力を得て、それぞれの地域の魅力向上や食材の販路拡大につながり得るとの手ごたえを感じることでできた意見交換であった。

第2部においては、さらに網走市と雲仙市の都市間交流を東京で支援する事業者や個人、網走出身の青年ら合計17名の多様な参加者を得て、網走と雲仙の交流の深化をどのような方向性で行っていくかに焦点を絞って意見交換を行った。参加者からは、「網走と雲仙の両地域の顔の見える関係から交流人口の増加の糸口が出来た」「あばしり七福神まつりへの出店や雲仙茶の無人販売など雲仙食材の網走への販路は広がったので、次は網走食材が雲仙でさらに売れる仕掛けを構築すべきだ」「網走と雲仙が共同で人口集積地または海外での販促イベントを確立できると良いのでは」などの意見が出された。さらに、両地域のご当地ちゃんぽんを軸に全国15地域のご当地ちゃんぽんを一堂に集めた「ワールド・ちゃんぽん・クラシック 2020」を3月末に鳥取県鳥取市で開催することについても確認（その後、新型コロナウイルスの感染拡大により中止決定）し、北と南の両地域が同イベントの活性化に向けて尽力する旨の共通認識を持つに至った。今回の意見交換は首都圏や長崎県雲仙市において、網走に心を寄せていただいている「関係人口」が数多くいることを実感する機会ともなった。今後も「関係人口」の縁を深く広く紡いでいく取り組みが必要である再認識した。

②「これからの医療とまちづくりシンポジウム」

日時：令和2年2月16日（日）午後1時～午後4時

場所：i.m.y ホール（名古屋市千種区）

参加議員：近藤憲治、立崎聡一

超高齢社会の到来と生活習慣病による疾病が蔓延する昨今、地域住民の心身ともに健康な状態を日常から維持し、健康寿命を延伸することで、地域の持続可能性を高めていこうという意識をもった人々たちが一堂に会する行事が「これからも医療とまちづくりシンポジウム」である。

今回は、名古屋市での開催であったが、東海地域の人口減少地域での具体的な事例紹介が当事者によって行われるとのことで、当市においても政策的に反映できる知見を得られるものとの判断から出席する運びとなった。講演は3部構成で行われた。

第1部は長野県阿南町の富草・和合へき地診療所の金 秀成 所長が現場での体験を踏まえた地域住民の健康づくりの取り組みを報告した。阿南町は人口5000人弱の山間地の自治体であり、高齢化率も42%を超えるなど、金院長の言葉を借りれば、「日本の未来が見える地域」である。金院長は2000年に同地のへき地診療所へ赴任して以来、「いのちのたねプロジェクト」と題し、住民参加型の健康づくりに取り組んでいる。圧倒的な高齢化の中で、高齢者自身が、まずは自らの命を「いのちのたね」として大切にするように働きかけ、自己の尊さを見つめなおす瞑想などを取り入れた健康教室を通じて、住民の意識が変わりつつあるという。特にお年寄りが、「諦め」に似た感情で人生を送るのではなく、「生きがい」をもって自立的に暮らしていこうというマインドになってきている点が報告された。まちづくりや高齢者の福祉というと「仕組みづくり」に目が向きがちだが、お一人お一人の心の在り方にも配慮をしていく必要があると認識した次第である。

第2部はMOA名古屋クリニックの柴 維彦 院長が厚生労働省も研究を進めている「統合医療」の概念について説明を行った。統合医療とは、西洋医学だけでなく東洋医学なども含めて「治療」だけでなく、「生活の質」（QOL）そのものの向上を目指す取り組み（医療モデル）と、地域コミュニティにおいてセルフケアや支え合いをもとに心身ともに健康な住民を増やしていくという取り組み（社会モデル）を補完的に関係させて健康長寿社会を目指す取り組みである。医療モデルと社会モデルのどちらかだけでは、補完関係が成立せずあくまでも双方のモデルを「車の両輪」として回していく意識が重要である。また、統合医療の展開に向けては国会議員の「統合医療推進議員連盟」が存在しており、我が国において政策的に進められているのも特徴である。具体的には厚生労働省（医療モデルと地域包括ケア）や文部科学省（教育現場での伝統的教養の伝達）、農林水産省（食育の推進）など各省庁でも既に関連する施策が実施されつつある。その上で、統合医療の推進が目指す将来像は、医療モデルと社会モデルを具現化しつつ、政治・行政・専門家・企業・市民が一体となった学際的な医療とまちづくりの実現である。それは、健康長寿社会

だけでなく、災害に強いまちづくりや医療費の適正化にもつながっていく、とのことであった。

第3部は岩倉私立岩倉東小学校 三浦 光俊 校長が同小学校で行った児童向けの情操教育の在り方について報告した。心身ともに健康な状態を確立するために、簡単なお花やお茶などを行う取り組みが全国各地にあるが、同小学校は外国人比率が50%超え、なおかつ、そのルーツを有する国々は様々という多様性に富んだ学校である。日本文化に触れた経験も無く、地域でのつながりも薄い児童に、日本への愛着や地域の絆、さらには心の落ち着きを実感してもらうべく、地元のボランティア団体の協力を得て、お茶の作法を簡略化した盆手前を授業で取り入れているとのことであった。また、子どもたちの絵画を教育長室や教育委員会の各部門に飾ったり、ボランティア団体が生けた一輪挿しをカウンターに置いたりすることで、学校と教育委員会の距離を近づけたり、教育委員会の内部にも「美をたしなむ感性」を共有したりするようにしてきたとのことである。三浦校長の現場感あるお話から、「美をたしなむ感性」が子どもたちの情操にプラスの効果を及ぼしていることがよく理解できた。

以上の3部の講演を拝聴し、心身共に健康な住民を増やしていくようなまちづくりは、国レベルでも様々な施策が打たれているところであるが、今後の網走市にとっても不可欠なものであると再認識したところである。また、健康なまちづくりを具現化していく上では、「美をたしなむ感性」や安心安全な食に対する関心を育む取り組みも地域に根差した形で進めていく必要があると改めて実感した。